

らゆらとした影が映り込む。

「…ああ」

感嘆の息を漏らしたのは果たしてどちらだったのか。

「…もう、こんなに濡れているではないか。そんなに好いのか…？」

文若の膝を跨ぐ様にしている下肢にも手を伸ばされ、秘裂を弄もよほられる。

耳穴にぞくりとした何かを塗り込める様に、耳元で熱く囁くそれにもふるりと身体を震わせてしまう。

「ああん、だつて…」

新婚と言えど、文若の仕事も忙しかった上に、花の身体の事情も重なっていたので、こうして睦み合うのは久し振りなのだ。

しかも、こんないつもと違う状況なら尚更か。

ちゅぶちゅぶと淫らな水音が、花の理性を削ぎ落としにかかると。

「…どうした？腰が動いているじゃないか？」

楽しんで言う文若が恨めしい。こんな風にしたのも

文若だというのに。

花は文若の頬に両手を添えると、くいと上向かせた。

「…花？」

不思議そうに見つめる文若の唇にちゅと吸い付い

た。その上で、唇を舌でなぞって粒の揃った歯列にも舌を添わせる。

「…っ」

観念した様に開いた唇に舌を差し入れて、先程から花を翻弄し続けている舌を絡め取る。花がそうやって口づけに夢中になっていると、仕返しの様に文若の指先が乳房の先端と下肢に伸ばされて、両方をいっぺんに弄もよほられた。

「…ああんっ」

堪えきれずに漏れた嬌声で口づけが解けた隙に、文若の唇は花の乳房に下りて先端を含んで、舌先で転がされる。とどめの様に、胎内に忍ばせた指とは別の指がぶつくりと膨らんだ花芯を転がし始めたので、花は否応なく高みに放り出された。

「…は、…はあ」

くたりと文若の肩に体を預けていると、その体をぐいと引き剥がされて文若が今の今まで仕事をしていた机の上に乗せられる。

えつと思う間もなく、何時の間にか衣の前を寛げた文若にふともを抱えられて、前触れもなくぐつと奥深く貫かれた。

「…んあっ！」